

【高松法務局長賞】

ファースト・ペンギン

高松市立古高松中学校 三年 横田結香

私は小学校高学年のころ、いじめを見たが、何もせず、黙つて見ているだけだった。標的は勉強と運動がともに得意ではない男の子で、誰かと話すのも苦手そうだった。いじめているのは、「スクールカースト」上位の発言力のある七人ほどだった。私はそれを見るのがとても辛かった。でも、みんなは何も言わなかつたし、私も何も言えなかつた。ある日の掃除の時間に、数人の男の子が標的の男の子に、「バカ」「汚い」などと言い始めた。その子は嫌がつてその子たちから逃げようとしているのに、追いかけて悪口を言い続けていた。すると友人が小声で「何が楽しいんだろう。」と言つた。私は、自分と同じように思つている子がいる事に驚いた。みんないじめを見て見ぬふりをして、何も言わなかつたからだ。

その日家に帰つた私は、友人のようにいじめを良く思わない子はいるのに、なくならない理由は一体何なのかを考えた。いじめをする子たちの気が強くて、とても逆らえない相手だからだろうか。相手が大勢だからだろうか。何より私は、みんながいじめを黙つて見ている状況こそが理由ではないかと思つた。「誰も声をあげない。自分が注意したら、次は自分が標的になるかもしれない。」そのときのクラスメート達はきっと、そう思つていたのだろう。そして加害者は、周りが何も言つてこないのでさらに勢い付いていく。

そんなとき私が思い出したのは、数年前の担任の先生が教えてくださつた「ファースト・ペンギン」の話だ。ペンギンの群れは、えさをとるために海に入らなくてはならないとき、最初はどの個体も海中に天敵がないか、安全であるかを気にして尻込みするのだ。だが、勇気

を振りしほつて一羽が飛び込めば、どつと後に続く。その初めの一羽に敬意をこめて、「ファースト・ペンギン」と呼ぶのだそうだ。先生は、私たちに「ファースト・ペンギンであつてほしい」とおっしゃっていた。私は、今こそ「ファースト・ペンギン」になろう、と決心した。クラスで起こっている問題に対し、少しでもできる事はないか考え、そして連絡帳にその日何があつてどう感じたかを書き、先生に相談した。その結果、昼休み中に先生が教室を見回り、現場を見た際に注意することになった。その後、露骨な嫌がらせや悪口は少し減つたようになりた。私は安心する反面、後悔もしていた。もつと早く行動しておけばよかつた。怖がらずに声をあげればあの子を少しでも早く安心させることができたかもしれないのに。と、今でも思っている。

私には人の目を気にしたり、緊張して、思つた事をそのまま正直に発言できなかつたり、気おくれして正しいと思う行動をとれなかつたりするところがある。この経験は、そんな私の短所と向きあうきっかけとなつた。いじめがいけない事だと分かつていながら、最初の一人になるのが怖くて行動できない自分を情けなく思うと同時に、集団で生活する上で、誰かが言わなくてはならない、しなくてはならない場面で、勇気を出して自ら行動する事がどれほど重要であるかを身をもつて学んだ。また、自分のまわりで起こる問題を黙認すると、事態をさらに悪化させてしまうのだと深く理解した。

私はこの経験をしてから、「何事も、勇気を出して」という言葉を心に留めている。例えば学校でのグループワークで誰も発言せず、課題がなかなか進まないときや、忙しそうな家族や友人が手伝いを必要としているときなどの身近な場面でも、「私がやります」と口に出すのはやはり緊張する。きっと、私以外にもそんな人たちは沢山いるだろう。だが、あと少しの勇気を出して、そんな緊張した自分を乗り越え、自分から声をあげて行動する「ファースト・ペンギン」になる事の積み重

ねが、誰かが理不尽に傷つけられることのない、助け合いながら安心して暮らしていける社会を実現させる一歩となるはずだ。まだまだ怖くて、積極的な行動をためらってしまうときもあるけれど、誰もが安全にすごすために、私は、どんなときも周りの人を思いやつて行動する人であるようにこれからも努めていきたいと、強く思つている。